

特集にあたって

浜松医科大学整形外科 松山幸弘

骨粗鬆性椎体骨折はアジア，とりわけ日本において頻度が高く大きな問題となっている。ひと言で椎体骨折といっても，単椎体の骨折から後壁損傷を伴うものや，複数の骨折による脊柱変形（後弯），さらには仙骨・骨盤輪骨折，DISHの合併など非常に幅が広い。多くの場合は保存的治療で治療するが，脊柱再建が必要となった場合，その骨脆弱性から脊椎外科に携わる者が非常に苦心している分野であり，関心も高い。近年私の知る限りでは，保存的治療から手術全般に至るまで網羅した書籍などはなく，今回企画をさせていただいた。特に，琉球大学整形外科の西田康太郎教授と日本大学整形外科の中西一義教授のご尽力で，最先端の治療を行っている先生方をご推薦いただいた。病態と診断では，高齢者脊椎手術における骨質評価の重要性を新ガイドラインの観点から大阪大学整形外科の古家雅之先生に解説いただいた。また，薬物療法も骨形成を主体としたテリパラチド，ロモソズマブの適応やデノスマブの長期使用結果を含めて解説いただき，さらには装具治療の効果についても市立青梅総合医療センター整形外科の加藤剛先生に解説いただいている。

今回の特大号での新しい取り組みは，多くの脊椎外科医が直面する骨粗鬆性椎体骨折をどのように扱っていくか，保存的治療，特に数多くある薬剤の中で何を優先し，そしてフォローのためにはどの薬剤を使用すべきで止めどきはいつなのか，また装具治療はどのようなタイプの装具がよいのかを提示していただいたことである。読者の皆様もお気づきだと思うが，リハビリテーションの重要性，特に背筋力強化とその具体的な方法についても論述いただいている。

特筆すべき点として，骨折タイプや骨癒合の状況，そして DISH 合併の有無によって固定範囲の選択はどうすべきか，また椎体骨折の治療でよいのか，後弯変形矯正が必要かどうかなど，その適応と手術手技についてスペシャリストにそれぞれ論述いただいた。さらに増加する椎体骨折に対して多職種チーム医療の確立と地域連携が必要となることは明らかであるが，各地域での取り組みの実際を解説いただいた。椎体骨折の連鎖予防には，病診連携，病病連携，そして地方自治体を含めた多職種連携をいかにつくり継続的に運営するかが大きな課題であり，診療報酬，予算の問題も絡んでくる。したがって，椎体骨折予防が社会へ与える費用対効果をオールジャパンで明らかにしていく必要性があり，近々の課題である。

振り返ってみると，大変重厚な，そして読み応えのある特大号が完成したと思う。企画したわれわれとしても，読者の皆様には，ぜひワクワクしながら読んでいただければ幸いである。